

槇野廣造著『古都千年物語——平安朝日誌 九八〇年代——』

磯 村 清 隆

京の街には、千二百年の時間が積み重なっている。その厚く堆積した時の地層を、私たちはどのようにして掘り下げ、歴史の彼方に生きる人々の生活と精神に触れることができるのだろうか。

「ひとつの事件、ひとりの行動」を丹念に明らかにしてゆくことによって、槇野廣造氏は、千年前の人間の営みに迫ろうとする試みを続けてきた。同氏の前著『平安朝日誌』は、まさにそうした成果の集大成なのだが、それを引き継ぎつつ、さらに視野を九八〇年代へと転じたのが、ここで紹介する新著『古都千年物語』である。

さて、本書は、これまでの本誌「書評」で毎回取り上げられてきた多数の論著とは、いささか趣が異なる。いわゆる「研究論文」の枠には収まらないし、単なる「エッセイ」とも違う。むしろ「歴史小説」の類ではない。強いてあてはめれば、千年前の社会を描いた「ノンフィクション」といえるのだろうが、形式的な分類などどうでもよいと思わせるほど、この著書は生き生きとしたエネルギーに満たされている。

そのエネルギーは、どこから来るのだろうか。まず感じられるのが、「『古』をさぐり、『古』に近づこうとして、いつも千年前の人と事件を明らかにしようとする努力は重ねている」（本書「あとがき」）という著者の、人間の営みへのあくなき関心、真摯で情熱的な思いである。そうした熱い眼差しで、平安中期の一〇世紀末と現代の二〇世紀末とを行き来しつつ、前の千年紀がやがて終わろうとする頃の平安朝貴族社会の現実へと、分け入ってゆくのである。

本書では、叙述の対象である西暦九八〇年代が、「円融朝（後半）」「花山朝」「一条朝（初期）」という、三つの世に区切られている。そして、それぞれの冒頭で、まず時代の概観（世相・事件・人物）が述べられ、続いて、各時代を代表する人物のプロフィールや逸話、特筆すべき出来事などが、すべて合わせて五十の小题により、オムニバス形式で語られてゆく。

取り上げられている話題を見渡してみると、佳人・奇才の逸話、高僧の評伝、ミステリアスな事件、華麗な宮廷行事など、筆者の

関心の対象が実に多岐にわたっていることに驚かされる。

歴史小説の一節を思わせるような、人間のドラマが綴られる（たとえば第一・四四話―藤原道長の逸話、第二七話―藤原朝光の後妻をめぐる話）かと思えば、また一方では、時代や世相を象徴するような社会的事件（たとえば第四話―比叡山根本中堂供養、第二五話―花山天皇の即位式）が、現場で取材したルポルタージュのようなリァリテイで描かれる。あるいは、第一〇話（法性寺座主の任命をめぐる騒動）・第三九話（錢貨流通促進の対策）・第四八話（国司の苛政に反旗をかけた百姓らの解文奏上）などのように、ジャーナリスティックな視点で、現実的社会生活のさまざまな事象が書きつづられてもいる。また、第一六話は、西の京の荒廃ぶりを記す慶滋保胤『池亭記』に関する話だが、このよく知られた記述も、都市景観や住居文化の問題として、「九八〇年代の社会」というジグソーパズルを組み上げるための一片となつてゐるのである。このほか、平安時代の文学作品とも関わりの深い人物が、生身の素顔をのぞかせてゐる話題にも、興味深いものがある。曾禰好忠の奇人ぶりがうかがえる話や、和泉式部の夫であつた藤原保昌の兄弟の斉明・保輔たちが、とんでもない悪党として「世間を騒がせて」いたことを語る話、それに「斎宮女御」・微子女王の話などなど。

いちいち紹介してゆけばきりがなが、このように、取り上げられてゐる多種多様な事柄の集積が、自ずから一つの（時代）の姿を形作つてゐるような、そんな厚みと味わいが感じられる著作

なのである。

ところで、この労作に対して、これまで知られていなかった新資料の発見や、斬新な史観、見過こされていた事実の指摘 などといった学術的成果を期待して読むことは、やはりお門違いであろう。あるいは、きまじめな「研究者的」関心と欲求に対しては多少距離を置いた立場から、一つ一つのエピソードが叙述されているといつてもよい。

本書が利用している情報源は、たしかに、おなじみの文献ばかりである。小右記・権記などの日記類、扶桑略記・日本紀略・公卿補任などの史料、大鏡・栄花物語、今昔物語・古今著聞集・古事談などの説話集、そのほか江談抄・袋草子、私家集など、歴史資料から文学作品までのあらゆるジャンルに及んでゐる。こうした現在見ることのできる資（史）料を縦横に駆使して、一つの「時代」を生きた人々の精神世界の有りように迫つてゆく筆者の技は、まさに正攻法と言える。

だが、その結果として得られた出来事や人物に関する叙述は、決して単なる資（史）料の継ぎ合わせにとどまつてはいない。オモテの事実・ウラの噂、玉石混淆、種々雑多な情報の断片を、有機的に統合し、一つの意味を持った「話」にまとめ上げるところに、筆者独自の創造的な営みが光つてゐるのである。たとえば、第一三話は尊子内親王についての評伝である。史料や歴史物語に記された断片だけからは見えてこない、この薄命の皇女の数奇な人生が、その生い立ちから死去まで、丁寧に語り綴られてゆく。

幼い日々を斎院として過ごした生活、円融天皇との「恋」、出家（薙髪）の真相、仏道への強いあこがれ、「火」との縁。それはまるで一つの小さな物語のように、余韻の漂う魅力的な小品に仕上がっているのであった。

そうしたエピソード群を繋いでいる縦糸にも相当するのが、著者独特の（語り）の力であるように思う。数々の多彩な話題が、（語り）の磁場の中で有機的に結び合わされ、一つの時代絵巻を形作っているのである。全体を包み込む「です・ます体」自体が、そもそも談話の語り口を感じさせるのだが、それに加えて、天皇・皇族などへの敬語の使用、出来事を実際に見聞したのを回想しつつ説き聞かせる歴史物語のような言い回しなど、文体面での特徴が目される。また、時には、たとえば第一二・一三・二七話などのように、栄花物語や源氏物語に見られる「語りの文体」と同様の印象さえ感じられる箇所も少なくない。その結果、千年の時を越えて今にやみがえった（語り手）が、まるで眼前に存在しているかのような思いに、読者は思わず引き込まれてしまうのである。「歴史」とは、一面では確かに「ストーリー」に他ならないということが、あらためて実感できる気がする。

またある時は、語り手が旅のガイドもしてくれる。比叡山延暦寺を訪ねる第四話の書き出しや、嵯峨・化野あたりの寺院案内（第一五・二二話）、嵐山大堰川の「三船祭」の紹介（第三七話）のように、京の都の歴史を訪ねる旅人にとって大いに役立つ話などが盛り込まれている点は、本書の実用的な（？）もう一つ

の意義として数えてよいかもしれない。

もちろん、精緻な「史実」による裏付けがあつてはじめて、そうした「物語」にも生き生きとした現実性が備わってくるのだという点を、私たちは忘れるべきではない。だが、本書をひもとく読者は、このさい「史実」への堅苦しい詮索は忘れて、史料を博搜した著者が巧妙に語ってくれる物語に想いをゆだね、千年前の貴族たちの世の中へとタイムトラベルに出かけるのがよいだろう。以上紹介してきたように、本書を構成している全五十五話に及ぶ個々のエピソードは、それぞれが（時代）の断面を露呈しているようで、実に興味深い。だが、その一つ一つの語りが魅力的なだけに、反面、円融朝後半から一条朝初期という時期の「全体像」がややもすれば見えにくくなっている、という難点をあげることもできよう。しかしながら、もちろん、西暦での一〇年を単位として形式的に縁取られた時間が、そのままでもとまった一時代を形作るわけではない。だから、その一〇年間を統一のイメージでもって総括してみたいなどというのは、あくまでも欲張りな読者のわがままにすぎないのだ。むしろ、安易な総括を受け付けられない、種々雑多な、多岐にわたる話題の集積にこそ、一つの（時代）の姿が、ありのままにすくい取られていると言つてよいだろう。そして、その点にこそ、本書の大きな魅力が存するのである。ともあれ、この一冊に束ねられているエピソードに導かれながら、私たち読者はいつしか千年前の京の都に入り込み、時間を越えた歴史の旅を楽しむことができる。あじわい深い、幸せな著作

である。

(白川書院 一九九七年二月 二七〇ページ 本体価格一八〇〇円)

(いそむら・きよたか 大阪城南女子短期大学)